



Title	シェイクスピア『ソネット集』における繰り返しのレトリック再考 (3) “my rude, barren, fresh and eternal verse”
Author(s)	渡辺, 秀樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2026, 2025, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106333
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シェイクスピア『ソネット集』における繰り返しのレトリック再考 (3)¹
“my rude, barren, fresh and eternal verse”

関西外国語大学教授（大阪大学名誉教授）渡辺秀樹

§1 シェイクスピア『ソネット集』の隠れたテーマ

筆者はこれまで数年続けてきた『ソネット集』の講義で、154 篇で繰り返されるメタファー表象や語句、音韻の特徴と意義について取り上げて、学生へ向けての説明で自ら気付いた、繰り返しと言い換え表現による各篇のテーマ提示、そのテーマの強調について、本共同プロジェクトに発表した数編の論文で持論を展開してきた。前回発表した「Shakespeare’s Sonnets に見える繰り返しのレトリック (2) *myself, thyself, and my verse*」では、『ソネット集』に見える人称代名詞の所有格の高頻度の使用から、美青年の若さと美貌を自分の詩の中で永遠に残すという決意、裏返せば、人の盛りは束の間のものだが、自分の詩文は永遠の価値があるという自負、これが『ソネット集』に見え隠れする真のテーマ、真の主張であろうとの結論に達した。本稿では前論で見落としていたソネットを指す名詞 **number(s)** を加えて、詩人が自らのソネットを指す言い換え表現を見直して、それらの名詞を修飾する形容詞に注目、154 篇での他の被修飾名詞との比較から、『ソネット集』での詩人のテーマ、主張について再考したい。²

§2 自身の詩を指す表現

『ソネット集』において詩人が自分の詩文・詩行を指す名詞は、集中の篇の並びから言えば **rhyme**, **verse**, **number(s)**, **line(s)**, **song(s)**、この 5 種が使われており、**poem** と **sonnet** は見えない。下の表 I はこれらの名詞が出現する篇と行を示したものである（17-14 は第 17 篇の第 14 行を指す）。

表 I 『ソネット集』中でのソネットを指す名詞の出現箇所³

	ソネット番号 - 行番号												
rhyme	16-4 17-14 55-2 107-11												
verse(s)	17-1 19-14 38-2 54-14 60-13 71-9 76-1 78-2 79-2 81-9 86-8 103-11 105-7												
number(s)	17-6 38-12 79-3 100-6												
line(s)	18-12 32-4 63-13 71-5 74-3 103-8 115-1												
song(s)	100-3 102-14 105-3												

この表からまずわかるのは、所謂 **Marriage Sonnets** (1-18) の終結部（16～18）で初めて詩人は自らのソネットへ言及し、集の中ほど（70～80 番台）で最も頻繁に自らの詩について述べて、第 1 部（1-126）の終わり近く（100 番台）で再び 4 篇で自分の詩について繰り返し述べていることだ。つまり第 2 部 **Dark Lady** 篇には 1 語も表れないのである。この集中的な言及が、自らの詩と詩才に特に意識的になったことを映しているとすれば、冒頭の **Marriage Sonnets** に見える美青年への賞賛が、相手の不在や他の詩人の登場によって不安、卑下、嫉妬、自尊の間を揺れ動き、初めは美青年の若さと美貌を損なうものとして敵扱いされていた時の翁 (**Time**) が、次第に、老齡者としての詩人の命の短さへの惜哀を描くためのモチーフに変わってゆく、こうした感情の変化の節目に当たっているのではないだろうか。

¹ 本稿は以下の科研の補助を受けている。科学研究費補助金（基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 III」（研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹））。脚注での **Shakespeare** の作品の行番号は、**Arden Shakespeare CD-ROM** (Thomas Nelson: 1997) による。本稿の **Sonnets** からの引用は **Burrow (2002)** の句読点によった。
² 本論集掲載の大森論文では、大場 (2018) や西崎順三郎 (1989) の見解を参照して、『ソネット集』中の “I” “me” が詩人自身ではなくフィクションとして捉えたと述べている。筆者はしかし『ソネット集』の “I” は、自身の詩、ソネットの永遠性を主張する時には詩人自身であるのだから、西脇の言「要するに。「ソネット」を自伝的に研究することは文学的研究ではない」（1989, p. 205）は言い過ぎであり、**Mr. W.H.** 氏や美青年が誰を指すかについての、歴代の膨大な研究例も、無駄なものは一切ないと信ずる。
³ 本図は大阪大学人文学研究科教授大森文子先生にデータをお渡しし、作表して頂いたものである。

次に明らかなのは、自らのソネットへの言及がある上記 23 篇中 6 篇でソネットを指す名詞を言い換えていること、名詞 *song* は 100 番以降でなければ使われないこと、言い換えが起きている場合、名詞 *verse* は必ず中心語として存在すること。そして中の 3 篇で第 1 行に、4 篇で最終行にこれらの名詞が起きていることである。これは表中で網掛けと太字で示した。英語の文章では、テーマに当たるものが言い換え表現で繰り返されるのであり、最初にテーマが提示、最後に結論が来るのであるから、これらの篇では詩人のテーマはソネットそのものとも言える。これらのうちいくつかは後ろで詳細に検討する。

表 II 自分のソネットを指す名詞とその修飾語⁴

名詞	回数	出現箇所
rhyme/rime	4	my barren rhyme 16-4, my rhyme 17-14, this powerful rhyme 55-2, this poor rhyme 107-11
verse	13	my verse 17-1, my verse 19-14, my verse 38-2, my verse 54-14, my verse 60-13, this verse 71-9, my verse 76-1 (barren), my verse 78-2, my verse 79-2, my gentle verse 81-9, my verse 86-8, my verses 103-11, my verse 105-7,
number(s) 前回見落とし	4	fresh numbers 17-6, eternal numbers 38-12, my gracious numbers 79-3, gentle numbers 100-6
line(s)	6	in eternal lines 18-12, these poor rude lines 32-4, these black lines 71-5, this line 74-3, my lines 103-8, those lines 115-1,
my song(s)	2	worthless song 100-3, my song 102-14, my songs 105-3

名詞 *line(s)* については、周知のように『ソネット集』では、老人の額の皺を意味しても使われている。詩人がペンで白い紙に黒い文字を書くように、時は古い筆 (*antique pen*) で皺を刻むのだ。⁵

O, carve not with thy hours my love’s fair brow,
Nor draw no **lines** there with thine antique pen.⁶
(Sonnet 19, 9-10)

また名詞 *number* も集中で「数」の意味でも用いられているが、これは単数形である。

In things of great receipt with ease we prove
Among a **number** one is reckon’d none;
Then in the **number** let me pass untold,
Though in thy stores’ account I one must be;
(Sonnet 136, 9-12)

「詩行」の意味では複数形で起きて、必ず褒誉の意の形容詞を伴っていることに注目したい。表 II で示す通り、他の名詞にも形容詞が付いているが、悪い意味の *barren*, *poor*, *rude* と、対照的な良い意味の *eternal*, *fresh*, *gentle*, *gracious*, *powerful* があり、言い換え名詞のうちで最多の *verse* は 1 度 *gentle* に修飾されるほかは形容詞が付かないことが際立っている。さらには、自分のソネットを明らかに指しているのに、*my* や *this* が付かない場合が良い意味の形容詞に多い事、何故だろうか。この疑問が本稿論考の発端である。
以下の節では『ソネット集』でソネットを示す名詞に付く形容詞に注目し、それぞれが集中で何の形容に用いられているかを比較、自分の詩と詩才に対しての詩人の意識をあぶりだしたい。特に重要と思われるのは *barren*, *gentle*, *eternal* である。集中で初めに自身のソネットへの言及があ

⁴ 筆者は第 100 篇の “worthless song” は Shakespeare の劇中歌など大衆受けする歌謡を指していると考え、考慮対象としなかったが、大森教授の御教示で Duncan-Jones の注釈 (p.310) で “some worthless song” は先行するソネット、例えば 97 番から 99 番を指している可能性があるとの記述を知って表に加えた (脚注 12 参照)。そしてソネットを指す名詞類語のうち *rhyme* の歌詞の低さについて大森論文第 4 頁で説明がある。
⁵ この詩人のペンで書かれる黒い文字については、本プロジェクト所載の大森文子「詩人が自負する詩の力：Shakespeare の Sonnets をめぐって」第 3 節「心は歌い、体は書く：身体行為としての表現」に詳論されている。
⁶ この *antique pen* という表現は、「昔の詩人のペン」の意で第 106 篇に再出する。(Then, in the blazon of sweet beauty’s best,/Of hand, of foot, of lip, of eye, of brow,/ I see their antique pen would have express’d/ Even such a beauty as you master now. (5-8)). なお 第 16 篇の “my pupil’s pen” についての論考は大森論文の第 2 頁以降を参照。

るのは第 16 篇で、ここに形容詞 **barren** が見られるので、悪い意味の形容詞から、出現箇所本文脈を見て行きたい。

§3 卑下・謙遜の形容詞 **barren, poor, rude**

まず **barren(ly)**であるが、美青年に結婚と子作りを勧める所謂 **Marriage Sonnets** で 3 篇連続して用いられるのは当然だ。第 11 篇から 13 篇まで、未婚で子を残さない人を不毛の土地や枯れる植物に喩えて、**perish, Borne on the bier** (荷台に積まれた / 棺に横たわる)、**fall to decay** とともに枯死・滅亡の意味場で現れている。

Let those whom Nature hath not made for store,
Harsh featureless and **rude, barrenly perish**.
Look, whom she best endow'd she gave the more,
Which bounteous gift thou shouldst in bounty cherish.
(Sonnet 11, 9-12)

When lofty trees I see **barren** of leaves,
Which erst from heat did canopy the herd,
And summer's green all girded up in sheaves,
Borne on the bier with white and bristly beard:
(Sonnet 12, 5-8)

Who lets so fair a house fall to decay,
Which husbandry in honour might uphold
Against the stormy gusts of winter's day
And **barren** rage of death's **eternal cold**?
(Sonnet 13, 9-12)

で、その 3 篇で「不毛」のイメージをたたみかけた後、初めて自分のソネットに言及して **my barren rhyme** と、へりくだっているようだが、疑問文に起きていること、私の不毛な詩文以外に時の暴虐から何が貴方の若さと美貌を守るのか、と、この形容詞の意味を転換するのだ。つまり不毛で枯死する詩文ではなく、若さ美貌を永遠の緑に保つ詩文、と言いたいのである。これは同じ行に見える **death's eternal cold** の形容詞 **eternal** に引き継がれて、集中で展開される重要概念であり、最後にまた論じる。

But wherefore do not you a mightier way
Make war upon this bloody tyrant, Time,
And fortify yourself in your decay
With means more blessed than my **barren rhyme**?
(Sonnet 16, 1-4)

詩人がソネットについて **barren** を用いるのは、実はここだけではない。

Why is my verse so **barren** of new pride,
So far from variation or quick change?
(Sonnet 76, 1-2)

間に 60 篇を隔てて再びこの形容詞を用いた時に、「私の詩は、何故もかくも新しさに欠けるのであろうか」という卑下の自問に始まるが、それは「あなた一人が常に (**always, still**) 私の詩のテーマであるからだ」と、一人を称賛する自分の詩の多様性への自負にすり替わるのである。

O, know, sweet love, I always write of you,
And you and love are still my argument;
So all my best is dressing old words new,
Spending again what is already spent:
(Sonnet 76, 9-12)

形容詞 **rude** は **rudely** も含めて集中 6 度現れる。形容詞が多義の時に、その意味は並置、または近接して起きる類義語か反義語で判断できるので、上に出した第 11 篇以外の 5 例、まず名詞 **lines** を修飾する第 32 篇では **poor** と共起して、文彩に欠ける、下品な、のような意味が推測される。

If thou survive my well-contented day,
When that churl Death my bones with dust shall cover,
And shalt by fortune once more re-survey
These **poor rude** lines of thy deceased lover,
Compare them with the bettering of the time,
And though they be outstripp'd by every pen,
Reserve them for my love, not for their rhyme,
Exceeded by the height of happier men.
(Sonnet 32, 1-8)

そして行頭 **and** の anaphora の例で有名な第 66 篇では、名詞 **virtue** のほぼ反義となっている。

And guiled honour shamefully misplaced,
And maiden virtue **rudely** strumpeted,
(Sonnet 66, 5-6)

しかし最も重要な使用例は次の第 78 篇である。

So oft have I invoked thee for my Muse
And found such fair assistance in **my verse**
As every alien pen hath got my use,
And under thee their poesy disperse.
Thine eyes that taught the dumb on high to sing,
And heavy ignorance aloft to fly,
Have added feathers to the learned's wing,
And given grace a double majesty.
Yet be most proud of that which I compile,
Whose influence is thine and born of thee.
In others' works thou dost but mend the style,
And arts with thy sweet graces graced be;
But thou art all my art and dost advance
As high as learning my **rude ignorance**.
(Sonnet 78, 1-14)

これは所謂 Rival Poet 篇と呼ばれる一つだが、第 6 行と 14 行の卑下の **ignorance** が、それぞれ後に続く第 8 行と 12 行の (thy sweet) **graces** の繰返しによって、強く逆転させられて、貴方は私の詩神であり、「貴方の美德・寛容」が「無学な私の粗野な詩」を高め (**aloft to fly**)、他の詩人が真似するまでになったのである、私の詩こそ読むに値する、という自慢、つまり **rude** は自尊に支えられた反義なのである。⁷

§4 褒誉・賞賛の形容詞 **powerful, gentle, gracious**

褒誉・賞賛の形容詞については、**fresh** と **eternal** を除き、ソネットを指す名詞の修飾語として『ソネット集』で現れた順にみて行きたい。

形容詞 **gracious** は『ソネット集』で 6 回起きる。最初に現在の美青年を朝の陽光に比して王侯扱いし、「聖なる権威」 (**sacred majesty**) という表現と共起する。

⁷ Shakespeare の他の詩や戯曲で名詞 **verse, rhyme** を修飾する形容詞には以下のものがある。**happy** **vers** (Timon of Athens, I. i. 21 (Poet)), **magic** **verses** (Henry the Sixth, Part I, I. i. 27), **bad** **verses** (Julius Caesar III. iii. 30), **rude harsh-sounding** **rhymes** (King John, IV. ii. 151), **dangerous** **rhyme** (Love's Labour's Lost, I. ii. 101), **guilty** **rhymes** (Love's Labour's Lost, IV. iii. 136), **bootless** **rimes** (Love's Labour's Lost, V. ii. 64), **scornful** **rhyme** (Merry Wives of Windsor, V. v. 91), **hard** **rhyme/ babbling** **rhyme** (Much Ado About Nothing, V. ii. 37-38), **truer** **rhyme** (Troilus & Cressida, IV. iv. 20).

Lo! in the orient when the **gracious** light
Lifts up his burning head, each under eye
Doth homage to his new-appearing sight,
Serving with looks his sacred majesty;
(Sonnet 7, 1-4)

続いて2篇で *fair(er)*, *gentle*, *kind* など女性の容貌や心根を誉める形容詞と共に用いられて、美青年に結婚して子をもうけることを懇願する文脈で、ここでも「王侯が臣下に親切な、丁重に扱う」という意味を効かせている。

O, change thy thought, that I may change my mind:
Shall hate be fairer lodged than gentle love?
Be, as thy presence is, **gracious** and kind,
Or to thyself at least kind-hearted prove:
Make thee another self, for love of me,
That beauty still may live in thine or thee.
(Sonnet 10, 9-14)

Points on me **graciously** with fair aspect,
And puts apparel on my tatter'd loving
To show me worthy of thy sweet respect.
Then may I dare to boast how I do love thee;
Till then not show my head where thou mayst prove me.
(Sonnet 26, 9-14)

次に現れる形容詞 *powerful* は2例のみで、第55篇で自身のソネットを形容しているが、先行する “the gilded monuments/ Of princes” から王侯の権力の意味を受け継いでいることは、先の *gracious* の例と似ている。

Not marble, nor the gilded monuments
Of princes, shall outlive this **powerful** rhyme,
But you shall shine more bright in these contents
Than unswept stone besmear'd with sluttish time.
(Sonnet 55, 1-4)

形容詞 *powerful* が集の終わりで、「この世のものとは思えぬ」、川西の注では “supernatural being” (p. 167) と解釈された、Dark Lady の醜さを魅力に変えてしまう力について使われていることは、筆者の興味をそそり、後の *gentle* の論考で再び言及することになる。

O, from what power hast thou this **powerful** might
With insufficiency my heart to sway,
To make me give the lie to my true sight,
And swear that brightness doth not grace the day?
(Sonnet 150, 1-4)

で、転換点となるのは第62篇である。しばらく集中で顔を見せなかった *gracious* が、こともあろうに詩人の顔の形容で現れるのだ。

Sin of self-love possesses all mine eye,
And all my soul and all my every part;
And for this sin there is no remedy,
It is so grounded inward in my heart.
Methinks no face so **gracious** is as mine,
No shape so true, no truth of such account,
And for myself mine own worth do define
As I all other in all worths surmount.
But when my glass shows me myself indeed,

Beated and chopp'd with tann'd antiquity,
Mine own self-love quite contrary I read;
Self so self-loving were iniquity:
'Tis thee, myself, that for myself I praise,
Painting my age with beauty of thy days.
(Sonnet 62, 1-14)

この驚きの言明は、しかし、鏡に映る現実の自分の顔、年老いてひび割れた顔の上に見る、自分と同一視するようになった美青年の顔の形容であることが最終 2 行連でわかる。第 5 行 “Methinks no face so gracious is as mine,” 「私の顔ほど優雅な顔はない」という *gracious* を自らの顔の形容に用いた自尊表現は、集中の *face-grace* とその反義となる *face-disgrace* の脚韻ペアの繰り返し（後の第 17 篇など）で下支えされ、やはり美青年の顔の写しとしているのだ。⁸ この美青年との一体感を経て、初めて自分の詩（ソネット）に対して形容詞 *gracious* が用いられるのである。

Whilst I alone did call upon thy aid
My verse alone had all *thy gentle grace*,
But now *my gracious numbers* are decay'd,
And my sick Muse doth give another place.
I grant, sweet love, thy lovely argument
Deserves the travail of a worthier pen,
Yet what of thee thy poet doth invent
He robs thee of and pays it thee again.
He lends thee virtue and he stole that word
From thy behavior; beauty doth he give
And found it in thy cheek; he can afford
No praise to thee but what in thee doth live.
Then thank him not for that which he doth say,
Since what he owes thee thou thyself dost pay.
(Sonnet 79, 1-14)

第 1 四行連を高松雄一訳で見よう。「私一人がきみの助けを求めて祈っていた頃には、私の詩だけがきみのやさしい恩恵を受けていた。だが、いまは、私の優雅な詩もおとろえはて、わが病める詩神は他人に座をあけわたす。」⁹ ここでは別の表現、「やさしい恩恵」と「優雅な」に訳出されて英語本文での対応が消えているが、第 2 行の *thy gentle grace* が私の詩に *grace* を与えて *my gracious numbers* が出来たのであって、自力ではないとはっきり述べているわけだ。つまりこの *my gracious numbers* という表現は見かけと異なって、高慢・不遜の表現ではないことになる。これは先に見た形容詞 *barren* や *rude* の卑下の意味が逆転されていることと通じ、シェイクスピアが自分の詩の形容語句には細心の注意を払っていることを思わせる。

形容詞 *gentle* は集中 14 篇に 15 回現れる。第 81 篇と 100 篇にソネットを指す名詞を修飾しているので、それに先行する出現箇所に注意したい。第 5 篇では、世の中の美しいもの全てとともに美青年を指す「時の美しい創造物」を時が暴君として滅ぼすことを述べる。

Those hours, that with *gentle work* did frame
The lovely gaze where every eye doth dwell,
Will play the tyrants to the very same
And that unfair which fairly doth excel:
(Sonnet 5, 1-4)

第 10 篇では「誰も愛さない」美青年に向い、心の中の憎しみを「優しい愛」に換えるよう促す。

⁸ *face(s)-graces(s)*: 17, 6-8; 94, 5-7; 132, 9-11. *face(s)-disgrace(s)*: 33, 6-8; 34, 6-8; 94, 5-7; 103, 6-8; 127, 6-8.

⁹ 『ソネット集』岩波文庫 1986. p. 111. ちなみに吉田秀生は「私だけがあなたの高貴な魅力をすべて具えていた / しかし、今では私の魅力に溢れた詩も輝きを失い」 (p. 83) と「魅力」に統一しており、中西信太郎は「私の詩だけが、君の優雅なめぐみを独占していた / しかし、いまや私の詩句は、そのあでやかさも色あせて」 (p. 160) と高松同様、*my gracious numbers* の重要性を訳出で示してはいない。

O, change thy thought, that I may change my mind:
Shall hate be fairer lodged than **gentle** love?
Be, as thy presence is, gracious and kind,
Or to thyself at least kind-hearted prove:
(Sonnet 10, 9-12)¹⁰

この第 10 篇で『ソネット集』で初めて人称代名詞 I と名詞 love が出現することは注意して良い。第 20 篇では有名な文句 “master mistress” で美青年に呼び掛けて、女のような顔を持つあなたは「優しい女ごころ」を持っているだろうと説く。

A woman's face with Nature's own hand painted,
Hast thou, the master-mistress of my passion;
A woman's **gentle** heart, but not acquainted
With shifting change, as is false women's fashion;
An eye more bright than theirs, less false in rolling,
Gilding the object whereupon it gazeth;
A man in hue, all 'hues' in his controlling,
Much steals men's eyes and women's souls amazeth.
(Sonnet 20, 1-8)

その第 2 四行連では、そのような男女の様々な魅力を持つ美青年が「男の目を盗み（釘付けにし）女の心を称賛で満たす」と「窃盗」のイメージが出された後で、第 40 篇では有名な oxymoron 的表現「優しい盗人」と美青年に呼び掛けるのである。詩人の心、愛を盗んだうえに、詩人の愛人まで盗んだ相手を **gentle** と形容しているのだ。¹¹

I do forgive thy robbery, **gentle** thief,
Although thou steal thee all my poverty;
And yet, love knows, it is a greater grief
To bear love's wrong than hate's known injury.
(Sonnet 40, 9-12)

このなじりの言葉の変奏は、『ソネット集』結尾で再び、今度はその愛人女性に向かって投げかけられる。「優しい裏切り者」と。先の形容詞 powerful も Dark Lady に向けてのものだった。

Love is too young to know what conscience is,
Yet who knows not conscience is born of love?
Then, **gentle** cheater, urge not my amiss,
Lest guilty of my faults thy sweet self prove.
(Sonnet 151, 1-4)

この二つの oxymoron 的表現が **gentle** の意味、両義性を示唆していないだろうか。第 81 篇と 100 篇の間に起きる **gentle** は、この推測を支持するようだ。

Some say thy fault is youth, some wantonness,
Some say thy grace is youth and **gentle** sport.
Both grace and faults are loved of more and less:
Thou mak'st faults graces that to thee resort.
(Sonnet 96, 1-4)

美青年の欠点と美点がテーマの本篇では、第 1 四行連で、名詞 **grace(s)** と対義の対義の **fault(s)** が 3 回繰り返されて、青年の美点と欠点の見分けがつかなくなった同化した状況を示している。『ソネット集』では、**gentle** と **grace/gracious** が近接して使われる傾向があることは、先に論じ

¹⁰ 『ソネット集』で love と脚韻構成するのは prove, approve, remove, move, above で、prove が 9 回と際立つ。その初例が第 10 篇で、最後の 2 篇でも押韻ペアで現れる。脚韻（構成語）の意義については次回に論考する。

¹¹ この「窃盗のイメージの連続性」については大森文子教授に教示を受けた。

た第 79 篇の “thy gentle grace” が代表的に示している。

次の第 81 篇は、有名な第 18 篇の決意の変奏であり（第 5 節で論じる）、自らの詩行の中に美青年の若き姿を留めることで「(私が) あなたの名前を今後、永遠のものとする」“Your name from hence immortal life shall have” と shall が見えることに注目したい。

Or I shall live your epitaph to make,
Or you survive when I in earth am rotten,
From hence your memory death cannot take,
Although in me each part will be forgotten.
Your name from hence immortal life shall have,
Though I, once gone, to all the world must die.
The earth can yield me but a common grave
When you entombed in men's eyes shall lie:
Your monument shall be my gentle verse,
Which eyes not yet created shall o'er-read,
And tongues to be your being shall rehearse
When all the breathers of this world are dead.
You still shall live (such virtue hath my pen)
Where breath most breathes, even in the mouths of men.
(Sonnet 81, 1-14)

この篇でも、貴方の名前ゆえに私の詩行も immortal になるのである、という永遠性の継承を “my immortal verse” とは言わずに “my gentle verse” によって断言しているのだ。形容詞 immortal は集中でここのみに現れるが、名詞 monument は第 55 篇と 107 篇にも現れ、第 55 篇は先に引用したように “Not marble, nor the gilded monuments/ Of princes, shall outlive this powerful rhyme;” と、第 81 篇の 1 行目の epitaph 「墓碑銘」に比される「大理石や金色の記念碑」より私の力強い詩行を長く生きさせよう」と shall による決意が示されており、第 107 篇の最終 2 行連でも “And thou in this shalt find thy monument,/ When tyrants' crests and tombs of brass are spent.” とソネット集が美青年の記念碑 monument と呼ばれて、shalt が詩人の決意を示しているのである。

第 5 篇の「時が作った（あなたという）優しい創造物を、時は自ら破壊する」というテーマ、そしてそこに形容詞 gentle が含まれていることが、第 81 篇での決意、このソネットが美青年の墓碑銘となり記念碑となる、に遠く反響してはいないだろうか。第 5 篇と第 81 篇の gentle は、集中で先行する「優しい」の意味ではないようだ。

Those hours, that with gentle work did frame
The lovely gaze where every eye doth dwell,
Will play the tyrants to the very same
And that unfair which fairly doth excel:
(Sonnet 5, 1-4)

Where art thou, Muse, that thou forget'st so long
To speak of that which gives thee all thy might?
Spend'st thou thy fury on some worthless song,
Dark'ning thy pow'r to lend base subjects light?
Return, forgetful Muse, and straight redeem
In gentle numbers time so idly spent.
(Sonnet 100, 1-6)

本篇に見える “some worthless song” は、筆者は初めはライバル詩人の作を貶していると思っていたが、詩人が自分のソネット創作への発想や気概の欠如が続いたことを述べているとすれば、劇中歌などを指して、詩人がソネットから離れて劇作に集中した時期のことを言っているのかも知れない。¹²とすれば、“gentle numbers” は第 3 行の “worthless song” と対比によって「大衆に好ま

¹² Katherine Duncan-Jones は “some worthless song suggests either that the poet has frittered his energies away on other verses, or that some of the preceding sonnets, such as 97-99, with their seasonal preoccupations, constitute a deviation.

れる歌謡ではなく、貴顕の人に献ずることができる詩」、「高貴な詩行」としか取れないだろう。

§5 形容詞 *fresh* と *eternal* の意義

では最後に、最も重要と思われる形容詞 *eternal* の使用を *fresh* との関連で見たい。全 154 篇中 5 篇で 6 回現れるこの *eternal* については昨年度の論文で一度論じている（特に 29-31 ページ）。そこで筆者は次のように述べた。

第 18 篇で早くも宣言されていたソネットの永遠性こそが (Nor shall Death brag thou wander'st in his shade;/ When in eternal lines to time thou growest:/ So long as men can breathe or eyes can see;/ So long lives this and this gives life to thee. (11-14))、実はソネット集の隠された主題であること、そしてその集の中で詩人、美青年、ソネット集の関係が次第に変化していくことが観取される。先に見た「三位一体」の概念を使うならば、詩人がソネットを用いて青年を称賛することから、相手と一体化した詩人自身、その美德を反映する物、その苦悩と悲哀を残すことにソネット集の意義が変わるのである。この意味でソネット集にはナルシストの美青年と、それを映すナルシストの詩人が歌われているのだ。…… 詩人とそのソネットは、神に等しい美青年を称賛する臣下の立場から、相手の美德や不徳も含めて一体感を獲得した詩人が、その二人の美貌と詩才を残す記念碑として自らのソネット集について歌う、つまり詩についての詩、メタポエムの形に変化していくのである。（渡辺 2025, pp. 31-32）

「詩人、美青年、ソネット集の関係が次第に変化していくこと」とはまさに、同一語句が繰り返しの度に指示物を変え、同一形容辞が異なるものを修飾することに反映されている。3 節と 4 節で、謙遜と自慢の意味の形容詞が集中でソネットを指すようになる変化の過程を見たが、ソネットを修飾した時には先行する *headword* の影響を受けて、額面通りの意味ではなくなっていた。褒誉・賞賛の他の形容詞が数多くある中、*eternal* は *powerful*, *gracious*, *gentle* とは重みが違う。*eternal* は神、天の属性であって (=immortal, heavenly)、temporal, ephemeral, earthly, mundane, mortal な人間やその業に用いられるべき語ではない。事実 “my gentle verse” “my gracious numbers” という詩人は、確かに 1 度も my eternal line(s) とは言っていない。集中でこの形容詞が何を修飾しているだろうか。初めに *eternal* が現れるのは *Marriage Sonnets* の第 13 篇、この美貌を持ったいたい誰が結婚せず子を残さず、美貌が死によって朽ち果てることを許すだろうか、と問いかける。

Who lets so fair a house fall to decay,
Which husbandry in honour might uphold
Against the stormy gusts of winter's day
And barren rage of death's eternal cold?
(Sonnet 13, 9-12 行) ¹³

ここで現れた死の表象の冬は第 18 篇で 3 度繰り返される *summer* で夏に転換され、3 度目には “thy eternal summer” と所有格が付き、*eternal* に修飾されて青年の若さと一体化する。

Shall I compare thee to a summer's day?
Thou art more lovely and more temperate:
Rough winds do shake the darling buds of May,
And summer's lease hath all too short a date;
Sometime too hot the eye of heaven shines,
And often is his gold complexion dimm'd,
And every fair from fair sometime declines,

Whatever *worthless song* refers to, it can surely not be a play.” (p. 310) と注で述べているが、筆者は、第 99 篇はともかく、第 97-98 篇、所謂美青年の不在を嘆くソネットは、季節のメタファを用いたかなり優れた詩と判断する。

¹³ Shakespeare は死を「永遠の眠り」と表現し、有名な Hamlet の独白中の “To die, to sleep” (*Hamlet* III. i. 60) 以外にも (“The mortal worm might make the sleep eternal;” (*Henry VI*, Part II.), “eternal sleep” (*Titus Andronicus* I. i. 155, II. iv. 15)、夜の眠りを「死の第 2 の自己」とも言う (“Which by and by black night doth take away, Death's second self, that seals up all in rest.” (*Sonnet* 73, 7-8)) などに示されている。

By chance or nature's changing course untrimm'd:
But thy **eternal summer** shall not fade,
Nor lose possession of that fair thou owest;
Nor shall Death brag thou wander'st in his shade,
When in **eternal lines** to time thou grow'st.
So long as men can breathe or eyes can see,
So long lives this and this gives life to thee.
(Sonnet 18, 9-14 行)

このように、第 3 四行連の初めと終わりに **eternal** を置き、自らのソネットに形容詞 **eternal** を用いる前に “thy eternal summer” を置いているのは一見、先に見た **gracious** の場合と同じだが、その第 79 篇では、あくまでも美青年の美德・美貌によって、それを映そうとするおのれの詩文の品位が高まるとの論理になるのに対し、若さと美貌は一時のものという本篇の第 2 四行連の内容から、詩人は自らのソネットの中で青年の美を永遠に残すとの決意を示すために、先に “thy eternal summer” を置き、それが不遜・傲慢とならないよう “my eternal lines” との表現は避けたようだ。自らのソネットへの言及は集中では第 16 篇で初めて現れ、“my barren rhyme” という形である。続く第 17 篇では冒頭行と最終行に my verse と my rhyme の類義語言換えがあつて epanalepsis 構造を取り、その自分のソネットこそが篇のテーマとなっている。第 16 篇から 18 篇において詩人はソネットですべてを論じているのだ。

Who will believe **my verse** in time to come,
If it were fill'd with your most high deserts?
Though yet, heaven knows, it is but as a tomb
Which hides your life and shows not half your parts.
If I could write the beauty of your eyes,
And in **fresh numbers** number all your graces,
The age to come would say 'This poet lies:
Such heavenly touches ne'er touch'd earthly faces.'
So should my papers (yellowed with their age)
Be scorn'd like old men of less truth than tongue,
And your true rights be term'd a poet's rage,
And stretched metre of an antique song.
But were some child of yours alive that time,
You should live twice; in it and in **my rhyme**.
(Sonnet 17, 1-14)

その第 6 行 “fresh numbers” とは、川西後注では「生々とした詩」(p. 92) だが、第 3 行 **tomb** のイメージに対するものではないか。墓(碑銘)は石で、中には朽ちた遺骸があるのだが、「詩(集)は生きている」で、当然、時が経てば「黄ばんで」古びてしまう (So should my papers yellow'd with their age (9)) が、その中には美青年のありし日の姿が変わらずに(生きて)残っていると。¹⁴ この形容詞 **fresh** も突然使われたわけではない。冒頭第 1 篇の “Thou that art now the world's **fresh** ornament/ And only herald to the gaudy spring” が、美青年を「世の生きた飾り」と賞賛し、続く第 3 篇では、「今や子をもうけて、鏡に映るその美顔を若く保て」と懇願して **fresh** を用いている。

Look in thy glass, and tell the face thou viewest
Now is the time that face should form another,
Whose **fresh** repair if now thou not renewest
Thou dost beguile the world, unbless some mother.
(Sonnet 3, 1-4)

そして第 11 篇では再び **fresh** を美青年がもうけるべき子供の形容に使って、「あなたが年老いた時、あなたの子が若い血を引き継いでいる」と述べるのである。

¹⁴ ここの **fresh** の意味は、*OED* fresh II.10.b. New, novel; not previously known, used, encountered, etc.; invented or introduced for the first time, original, innovative. 「つまり私の新しい詩の中で」ともとれる。

As fast as thou shalt wane, so fast thou grow'st
In one of thine, from that which thou departest,
And that **fresh** blood which youngly thou bestowest
Thou mayst call thine when thou from youth convertest.
(Sonnet 11, 1-4)

このように先行する 3 例の後で詩人が自らの詩の形容に **fresh** を用いているのであれば、“**fresh numbers**” とは単に「新しい詩」、「生々しい詩」ばかりであろうはずはなく、「あなたの生き写しの詩」「(老いた時にあなたの若い姿を見せる) あなたの子に等しい詩行」の含意を読み取りたい。で、**eternal** に戻れば、集中で 5 回しか出現しないこの形容詞が自らのソネットについて 2 度用いられているのは、もっと注目されてよい。第 38 篇においても “**eternal numbers**” は自らのソネット集を指しながら、所有格の **my** を伴わない。

And he that calls on thee, let him bring forth
Eternal numbers to outlive long date.
(Sonnet 38, 11-12) ¹⁵

形容詞 **eternal** の第 4 例は第 1 例と呼応して、「永遠の死」に用いられている。

When I have seen by Time's fell hand defaced
The rich proud cost of outworn buried age,
When sometime lofty towers I see down-razed
And brass **eternal** slave to mortal rage;
When I have seen the hungry ocean gain
Advantage on the kingdom of the shore,
And the firm soil win of the watery main,
Increasing store with loss and loss with store;
When I have seen such interchange of state,
Or state itself confounded to decay,
Ruin hath taught me thus to ruminate,
That Time will come and take my love away.
This thought is as a death, which cannot choose
But weep to have that which it fears to lose.
(Sonnet 64, 1-14)

この第 64 篇については以前の共同プロジェクト所載の拙論で、各四行連冒頭の “When I have seen” の 3 度の繰り返しの効果を考察して、下のように述べた。

この 12 行の冒頭と結尾に置かれた擬人化された **Time** が **epanalepsis** の構造で主題として強調されている……この「時 (による諸々の変化と消滅)」を印象付けるために「時」の接続詞 **when** が 4 回繰り返されているのは偶然ではない……主題となる「時」**Time** は第 12 篇では第 1 行、第 10 行、第 13 行に繰り返され、第 64 篇では第 1 行と第 12 行に現れて、ともに「包み込み構造」(**envelop pattern**) ないし、「隔語句反復」(**epanalepsis**) というべきパターンで強調されている……冒頭の “**Times' fell hand**” のイメージは第 12 行の “**take my love away**” に繋がって、「時の神の残酷な手によって、私の愛する人が連れ去られる時」という言辞を形作る。(2021, p. 11)

このよう詩人は、最後に **love** に対して用いる前に、形容詞 **eternal** によって「美青年の死」を思うのだ。『ソネット集』第 108 篇に現れる **eternal** は「永遠の愛」というテーマを現わしているのと同時に、形容詞 **fresh** と共起しているではないか。高松訳「こうして、永遠の愛は愛の青春の姿をたもちつづけ、老いしなび、朽ちることなど心にもかけず、いずれは必ず刻まれる皺も気にとめず、むしろ、老年をおのが童僕にしたてていつまでも仕えさせる」

¹⁵ “**eternal number(s)**” は OED に 1 例用例が採録されている。

So that **eternal love** in love's **fresh** case
 Weighs not the dust and injury of age,
 Nor gives to necessary wrinkles place,
 But makes antiquity for aye his page,
 (Sonnet 108, 9-12) ¹⁶

先に見た第 17 篇の “in fresh numbers” という語形と並行するこの “in (love's) fresh case” は偶然だろうか。

本共同プロジェクト所載の大森論文では、「美青年の美德を盛る容器」としてのソネット（集）というテーマが論じられて、第 108 篇も取り上げられているが、第 105 篇との関連で「同じ一つのことを書くという内容」の点から考察されている。しかし筆者は、大森論に通底するテーマ「入れ物としての詩（集）」に触発されて、上の “**eternal love** in love's **fresh** case” を「いつまでも若い容器（ソネット）の中で永遠の愛の姿が保たれる」ととりたのである。これは深読み過ぎるであろうか。¹⁷この第 108 番には、先の **eternal** が 2 度出現して高らかに永遠の夏を寿ぐ第 18 番と比べてみれば、詩集中での詩人の精神成熟の過程、落ち着き、諦念を感じざるを得ない。¹⁸

『ソネット集』で詩人が自身のソネットに対して用いる形容詞は 2 種あり、謙遜・卑下の **barren, poor, rude, worthless** と自尊・褒誉の **fresh, eternal, powerful, gracious, gentle**（の順）である。これだけで一つの見解であるが、集中でのこれら形容詞の使用文脈を見れば、謙遜・卑下の形容詞は反義となっており、自尊・褒誉の形容詞も先行する使用例から受けた意味の変容を呈し、重要な **fresh** と **eternal** の場合は、詩人は特に美青年の若さや美德を映すことで、つまり詩の主題が詩の価値を高めていることを示すために、所有格の **my** を付けることを避けたと見ていいだろう。

death (13)	youth / sonnets (18)	sonnets (38)	death (64)	love (108)
------------	----------------------	--------------	------------	------------

形容詞 **eternal** は「死＝冬」「若さ＝夏」「詩」へと **headword** を換えて、再度、美青年 (**my love**) を連れ去る「死」の酷い手を思う篇に現れて、最後に「愛」(**love**) と結びついて終わるのである時の流れに逆らえず人は必ず死を迎えるが、永遠に続いてほしいと願うのは若さと愛である、それは叶わない願いだけれども、詩文の中で永遠に残¹⁹るようにと願う、これが『ソネット集』の明白なテーマであって、当たり前すぎ周知のことだが、自分のソネットを修飾する形容詞の集中での巧みな使用によって、自らのソネット集の永遠性への自信も疑いなく示されているのだ。

Rival Poet 篇で詩人は相手の詩に **great** という形容詞を用いている。この論考の後では、筆者にはこの形容詞が現代英語話者の相槌、賞賛の意味もなく口に出す “That's great” のように響いた。

Was it the proud full sail of his **great** verse,
 Bound for the prize of all too precious you,
 That did my ripe thoughts in my brain inhearse,
 Making their tomb the womb wherein they grew?
 (Sonnet 86, 1-4)

英詩の講義で日本でも外国でも Shakespeare の詩を扱う時、1 回だけの講義であれば *Venus and Adonis* や *The Rape of Lucrece* ではなく『ソネット集』第 18 番か 116 番を論じるであろう。集中には他にも名品・傑作がいくつかあるのだが、何故第 18 篇や第 116 篇なのか。最後に表 I をも

¹⁶ “eternal love” は *Lover's Complaint* の 238 行（第 34 連）にも見え、Shakespeare の好み remove と脚韻を成している。Twelfth Night V. i. “A contract of eternal bond of love”

¹⁷ この表現については歴代校訂者の様々な注釈があるが、川西によるまとめには “in its state of always being fresh” (Dover Wilson), “in the youthful exterior of the beloved”(T. G. Tucker), “expressed in a form of words that never loses its vitality” (Ingram & Redpath) が紹介されている (p. 142)。

¹⁸ 形容詞 **eternal** の使用については、本論集の大森論文でも注目し、2 節後半で詳論している。

¹⁹ これには異論もあろうかと、この 200 年に刊行の英詩代表的アンソロジー数編でのソネットからの引用篇を調べた結果、*Golden Treasury*, *The Oxford Book of Sixteenth Century English Verse* (1932 ed. By E. K. Chambers), *Sonnets; From Dante to the Present* (Everyman's Library Pocket Poets: 2001) をそれぞれ 19 世紀、20 世紀、21 世紀の出版として代表させれば、第 30, 106, 116, 146 篇が 3 者に、第 18, 32, 53, 60, 66, 73, 129 篇が 2 者に共通に採られている。筆者個人の評価では第 30 篇と第 73 篇が傑作であると考えるので、これらが選集に共通に採られていて嬉しく思う。

う一度見て貰いたい。先に述べたように、詩人が自らの詩に意識的になり、連続して詩論を展開したのは第 16 篇から 18 篇、締めめの第 18 編で形容詞 *eternal* が自らの詩を直示的でなく指して初めて使われ、次いで 70 番台から 80 番台で集中的に表れて、その後第 2 部とも言うべき *Dark Lady* 編 (第 127 篇以降) への移行前、100 番台に最後の詩論が展開されているのである。その締めとも言うべき第 116 篇で「相手が変わるのを見て変わる愛は真の愛ではない」との決定的自覚が示されているのである。『ソネット集』から 1 篇を選ぶなら 18 番か 116 番だね、との安易な選択には、実は裏打ち・基盤があるのではないか、どちらの 1 篇でも、詩人の決意を痛感するからだろう。1609 年刊『ソネット集』出版者 Thomas Thorpe は献辞で Shakespeare を “ovr ever-living poet” と評する。このような論文を 21 世紀に日本人が書いていること、これがその証左である。²⁰

参考文献

- Bradbrook, M. C., ed. 1953. *The Queen's Garland: Verses made by her subjects for Elizabeth I, Queen of England Now collected in Honour of Her Majesty Queen Elizabeth II*. London: Oxford University Press.
- Booth, Stephen, ed., 1977. *Shakespeare's Sonnets*. New Haven and London: Yale university Press.
- Burrow, Collin, ed., 2002. *The Complete Sonnets and Poems*. Oxford: Oxford University Press
- Duncan-Jones, Katherine, ed., 1997. *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc
- Edmondson, Paul, and Wells, Stanley, eds., 2020. *All the Sonnets of Shakespeare*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Evans, G. Blackmore, ed., 1996. *The Sonnets*. The New Cambridge Shakespeare. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gollancz, Israel, 1919. *Shakespeare's Sonnets* (Temple Shakespeare). London: J. M. Dent.
- North, Marcy L., 2010. “The Sonnets and Book History,” pp. 204-221. The 13th chapter in Schoenfeldt (2010).
- Post, Jonathan F. S., 2017. *Shakespeare's Sonnets and Poems* (A Very Short Introduction). Oxford: Oxford University Press.
- Schiffer, James, ed., 1999. *Shakespeare's Sonnets: Critical Essays*. New York: Garland Publishing Inc.
- Schoenfeldt, Michael, ed., 2010. *A Companion to Shakespeare's Sonnets*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Smith, R. Bruce, 1999. “I, You, He, She, and We: On the Sexual politics of Shakespeare's Sonnets,” pp. 411-429. In Schiffer (1999).
- Spaveck, Marvin. 1966. *A Complete concordance and systematic Concordance to the Works of Shakespeare*. Heidesheim : Olm.
- Vendler, Helen, 1997. *The Art of Shakespeare's Sonnet*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press.
- Wilson, John Dover, 1966. *The Sonnets*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大場建治 (編注訳) 2018. 『ソネット詩集』 (研究社シェイクスピア全集別巻) 東京: 研究社.
- 大森文子 2015. 「Milton の叙事詩的比喩とメタファー認識」『言葉のしんそう (深層・真相)』 東京: 英宝社、385-17.
- 2018a. 「喜びと悲しみのメタファー: Shakespeare の Sonnets をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース (言語文化共同研究プロジェクト 2017)』(渡辺秀樹編集) 大阪大学大学院言語文化研究科、19-28.
- 2018b. 「人の心と空模様: シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究 1』(鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編) 東京: ひつじ書房、175-104
- 2021. 「Shakespeare の Sonnets における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2020)』(渡辺秀樹編集) 大阪大学大学院言語文化研究科、15-27.
- 2023. 「鏡と水仙—シェイクスピアの Sonnets における隠されたレトリック」『レトリックと文法 (言語文化共同研究プロジェクト 2022)』 (大森文子編) 大阪大学大学院人文学研究科、1-14.
- 2025. 「愛する人と自らと: シェイクスピアの Sonnets における関係性のメタファー」『「レトリックはメッセージである」: 修辞・意味・認知の関わり 言語文化共同研究プロジェクト, 2024』 (アンディ・村上スミス篇). 1- 大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻.
- 川西進編 1971. 『Shakespeare's Sonnets』 東京: 鶴見書店.
- 櫻井正一郎 1979. 『結句有情—英国ルネサンス期ソネット論—』 京都: 山口書店.
- 中西信太郎 1976. 『シェイクスピア ソネット集』 東京: 英宝社.

²⁰ 現行電子版 OED の 見出し語 *ever-living* には神以外、「名声」への適用例の欄の 3 例として “a1616 That euer-liuing man of Memorie, Henrie the fift. W. Shakespeare, Henry VI, Part 1 (1623) iv. iii. 51” が見えるが、冊子体の初版では b. fig. Of a name, fame, etc.: Immortal. の初例が “1591. Shaks., 1 Hen. VI., IV. iii. 51. That euer-liuing man of Memorie, Henrie the fift.” であった。

- 西脇順三郎 1989. 「シェイクスピアのソネット」『芭蕉・シェイクスピア・エリオット』 (pp. 203-205) 東京：恒文社.
- 吉田秀生訳 2008. 『シェイクスピアのソネット集』 東京：南雲堂.
- 渡辺秀樹 2004. 「人名のメタファー研究序章 シェイクスピア劇の登場人物名に由来する OED2 の見出し語と用例考察」『メタファー研究の方法と射程（言語文化共同研究プロジェクト 2003）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科 23-33.
- 2011. 「シェイクスピアにおける賞賛と罵倒のレトリック 動物名人間比喩用法の対義・類義の構造」『文化とレトリックトリック認識（言語文化共同研究プロジェクト 2010）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科 1-20.
- 2019. 「英詩感情語メタファーの系譜第 2 回 シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション（言語文化共同研究プロジェクト 2018）』（大森文子編）大阪大学大学院言語文化研究科 1-10.
- 2021. 「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考：“when~then~” の繰り返しを中心に。」『感情・感覚のレトリック（言語文化共同研究プロジェクト 2020）』（渡辺秀樹編）大阪大学大学院言語文化研究科 3-13.
- 2023. 「Hamlet における動物名の繰り返しと列举の意味—翻訳で失われるメタファー義の問題，そして雲の場を中心に」『レトリックと文法 言語文化共同研究プロジェクト 2022』（大森文子編）大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻. 15-25.
- 2024. 「英詩における主題提示音分散 (hypogram) 再考: Herrick と Wordsworth, Shakespeare と Blake の比較から」『こちら側とあちら側のレトリック —メタファー・翻訳・認言語文化共同研究プロジェクト, 2023』（アンドリュー・村上スミス篇）15-23. 大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻.
- 2025. 「Shakespeare's *Sonnets* に見える繰り返しのレトリック (2) *myself, thyself, and my verse*」『「レトリックはメッセージである」：修辞・意味・認知の関わり 言語文化共同研究プロジェクト, 2024』（アンドリュー・村上スミス篇）. 17-33 大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻.